国語部会

| |
|---|
| 県研究主題<br>児童一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を重視した学習指導と評価の工夫・改善 |

提案１　　提案者　神山　弘樹（湘南三浦地区）

| |
|---|
| ＜研究主題＞<br>読み取ったことを伝え合うことで、互いの考えを深め合う学習活動について<br>―　物語文「海の命」の学習を通して　― |

１　提案内容

（１）　課題設定の理由（学級の実態）

①　１学期の取り組み「カレーライス」の授業から

叙述に根拠を求めて読み取らせていたが、表面的な意味しか捉えられていなかった。また、登場人物の内面に描かれた心情まで考えていた児童が少なかった。例えば「なぜひろしは、またカレーを作ったのか。」という発問に対して、児童は「お父さんにも元気になってほしかったから。」と考えた。ひろしにとってカレーライスとはどういうものか、なぜカレーライスでなければならなかったのか、ということまで考えが及ばなかった。物語を読むための観点である「場面の構成」「作品のテーマ」「抽象的イメージ」などを読み取る力が育っていなかった。

②　ふだんの話し合い活動から

「何を答えていいか分からない。」「自分より優秀な友達が発言してくれるから、自分は発言する必要がない。」などの理由で、一部の児童が中心となって進んでしまうことがある。

（２）　取組

①　本文への書き込み

教員が本文を打ち込んだワークシートに、感じたことや疑問に思ったことを書き込ませた。全員が意見をもつことで自分事として捉えさせ、一部の児童で授業を進めるのではなく全員参加の話し合いへと意識化した。

また、どのようなことを書き込んだらいいか分からない児童には、書き込みの視点を提示した。視点は「題名、『海のいのち』に深く関係すること」「太一の心情」「太一と登場人物の相互関係」についての叙述に注目することである。

叙述に注目させることも書き込みでねらっていることの一つである。例えば父が言った「海のめぐみだからなあ。」という部分から、父は海に感謝していることに気づくことができた。

②　授業のパターン化

２時間を１つのまとまりとして、前半１時間目は、「全体で音読」「個人の書き込み」「グループでの話し合い」、後半１時間で「全体で音読」「クラスでの話し合い」「振り返り」の活動を６場面繰り返した。パターン化することで児童が見通しをもって活動できるようにした。

③　課題作り

クラス全体で話し合う課題は、「児童に読み取らせたいこと」と「グループで出た問題」という視点をもとに、教員が考えた。例えば、第２場面において児童に読み取らせたいことは、「太一が与吉じいさの弟子になった理由」「与吉じいさの生き方」「与吉じいさと父のちがい」であり、グループから出た問題は「なぜ太一は与吉じいさの弟子になったのか」であった。そこで全体で話し合う課題を「千びきに一ぴきでいいと言った与吉じいさの言葉の意味は何だろう。」とし、児童が意欲的に学びながら、その時間に付けたい力を達成できるようにした。

また、全員が参加するために二者択一の発問も行った。例えば「与吉じいさとおとうの性格は似ているのか」などである。どちらかを選択するときには、叙述に根拠を求めるようにした。また相異に着目することで、今までの学習を振り返ることにも繋がり、太一の中に相反する二つの漁師像が育っていることに気づくことができた。

（３）　成果と課題

①　成果

ア　書き込みを行う活動では、叙述に注目して自分の考えを書くことができた。

イ　話し合いでは、「〇〇さんの言うように」や「□□という意見と違って」と友達の発言を踏まえた上で自分の考えを述べる様子が見られた。

ウ　児童が書き込みを行ったワークシートを回収し、教員が毎時間目を通すことで、児童一人ひとりのつまずきを把握し、指導に生かすことができた。また、児童の考えの広がりや深まりを見取ることができた。

②　課題

ア　授業時数を多く要してしまった。クラス全体で取り扱う課題をより精査して、ポイントを絞っていくようにしたい。

イ　児童が読み取った考えを尊重したために、解釈の間違いが起こったり、話し合いの結果、教員が読み取らせたい内容と異なる読みをしてしまったりした。グループでの話し合いの最後に、学級全体で読み取りを統一することをしなかったが、それで良かったのか、という迷いが残る。

２　協議内容

【「書き込み」という学習活動について】

・　感じたことを書き込むことで発想が自由に広がった。自分なりの捉えで読ませたい。
・　書き込みのパターン化を行ったことで、見通しをもって活動できた。
・　反面、書き込みは時間がかかる。焦点を絞ったり、疑問を抽出したりする工夫が必要である。

３　まとめ

現行の学習指導要領には「主題」という言葉がなくなっている。つまり物語文の主題を読み取ることが最終目的ではなく、自分の考えを広げたり深めたりすることが大切である。したがって、統一した「読み」にすることは必要ないとは言わないまでも、弾力的で良いのではないか。学習指導要領に則していること、その上で、児童の実態を踏まえた学習内容や課題であること、しっかりとした年間指導計画や単元計画を作成し、前学年や前時をつなげていくことなどを視点として授業作りをしていきたい。

提案２　　提案者　小林　真（横浜地区）

＜研究主題＞
相手や目的に応じて自分の考えを的確に書いたり、発表したりする指導の工夫・改善
―　実社会と関わり、自分の考えを明確に伝える力を身に付ける単元づくり　―

１　提案内容

６年生が社会と関わっていく中で疑問を持ち、疑問について自分の考えを、説得力をもって伝えていくための知識や技能を身に付け、活用する姿の実現を目指し、単元『米を食べることの大切さを、説得力のある事例をもとに投書で伝えよう！～「新聞の投書を読み比べよう」東京書籍各社新聞投書、新聞記事～』を計画した。児童にとって必要感のある課題を設定し、交流を通して言葉に対する見方や考え方を深められるよう、次の３つのポイントを意識して取り組んだ。

（１）　児童にとって必要感のある課題を設定し、交流を通して言葉に対する見方や考え方を深めるポイント

①　「実社会、実生活につなげた課題設定」

「投書」を書く言語活動を取り上げたのは、投書が実社会の不特定多数に向けて発信された意見を述べた文章であることから、目的意識や相手意識をもって取り組めると考えたからである。また、字数制限があるため、説得力のある事例を選び、効果的な構成を考えることができるうえに、書き直しが容易にできると考えたからである。児童の実生活に近いテーマとして「若者の米離れ」の新聞記事を取り上げ、５年生で米の学習を想起させて投げかけていった。

②　「身に付けたい力を繰り返し活用する場の設定」

ア　授業の前半１モジュール（１５分）で、単元を通して様々な投書を読み、構成や記述などの表現の工夫をとらえた。後半２モジュールで課題設定、取材、選材、構成などを進めた。

イ　年間指導計画で指導事項の偏りがないようにし、力が身に付いていくようにしている。話す指導事項として、一年を通して新聞記事の感想の発表や紹介をする活動を繰り返し行った。

③　「表現する内容や言葉を検討し合う場の設定」

ア　「構成の検討」をワークシート「構成メモ」を使って行った。投書を読むことで、児童が見つけた冒頭の部分の書き方を整理した「はじめの書き方編」ガイドを使って、まず、冒頭の書き方をパターン化して書いていった。その他にも「基本の構成編」「事例選び&主張の書き方編」ガイドを提示して指導した。読者に米を食べてもらうという目的を意識して、付箋を使って構成と選材を行う構成段階で、検討し合う協働的活動が重要といえる。友達の改善点を見つけることで、文章を読む視点が定着していき、自分の投書を書く力につながる。

イ　書き上げた投書の推敲段階では、推敲の視点を提示するとともに自分や友達の投書を「社会に出してよいか」を考えて検討させた。

（２）　成果

① 投書という実社会に向けて書くという活動を行ったことで、意欲・目的意識・相手意識をしっかりともち、これが社会に出たらという視点をもって書くことができた。

② これまで身に付けた力を活用する場面を繰り返し設定したことで、的確に書く力がつくことにつながった。

③ 友達同士で検討したり、アドバイスし合ったりする協働的活動で、文章を工夫、改善する視点が身に付いた。

２ 協議内容

【児童一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」を育成するための工夫】

Ｑ：投書から見つけた工夫の共有化をする際、個々の力の差に応じて工夫したことがあったか。

Ａ：手立てとして、グループの中で理想するやり取りや使う言葉を考えて「投書を評価するポイント例」「投書の説明の仕方」というガイドを提示した。

Ｑ：投書を扱う２回目の取り組みを行うにあたり、以前上手くいかずに変えたところはあるか。

Ａ：テーマを決めないと、課題意識のばらつきがあり、交流が難しく、構成がバラバラで指導しきれなかった。そこで、全員で向かっていける同じ課題にした。

Ｑ：この単元で、必要感のある課題設定にするための素地や、教師の仕掛けや手立てはあったか。また、投書を教材としたが、教材を選ぶ視点があれば教えてほしい。

Ａ：単元の起点として、新聞記事を扱ったことと、年間を通して新聞記事を読ませていたことがベースになった。日本全国に一気に伝える方法は、投書だという考えを、児童から引き出していった。また、教材選択の視点は、「構成」を中心にした。説得力をもって話し、書くことができる力を付けたかったので、取り上げた投書は、根拠（体験、データ、名言等）が違うものであり、根拠が足りないものも担任が自作し提示した。

３ まとめ

（１） 意見文を書かせるために投書という言語活動を使って、構成する力と推敲する力を付けたいと明確にしていることが児童に付けたい力を付けることにつながった。教師が投書を書き、楽しみながらこの単元を作っているところが魅力的である。

（２） ５年生での経験から共通の課題を設定し、児童が意欲を持って取り組めるようにした手立てがよい。年間を通した新聞記事に関する言語活動のつながりや経験が有効であった。

（３） 年間指導計画が、指導事項を年間のつながりや配列のバランスを考え、「児童が見せてほしい姿」で力が付いたことを確かめられるように作られている。１年間で終わらせないで次の学年に引き継いで継続していき、９年間の学びのつながりも含めて考えているところがよい。

（４） 何のためにやるのかという目的意識が設定された話し合いや振り返りが文章の工夫、改善につながった。「冒頭部分の工夫」を担任が改めて整理したガイドの提示や、自分で説得力ある事例を選べるように工夫されたワークシートの形式が有効な手立てであった。授業時間を柔軟に構成して、前半１５分後半３０分として、つながりのある活動を繰り返した意義があった。他教科領域とも関連させて経験値を振り返り既知を確認し、年間指導計画を踏まえながら、児童に必要感が持てる課題設定することが大事である。